

平成29年度 学校自己評価表(年度当初)

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)		「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。		今年度の重点目標		1 主体的学習者の育成 2 キャリア教育の充実 3 積極的な活動の創成 4 国際理解教育の充実と図書館の「知のセンター化」 5 定時制教育の充実	
H29年度当初					評価結果()月		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
1. 主体的学習者の育成(企画推進)	文武両道と規律ある生活による自立の促進	・学校の授業時間は確保され、日々の諸活動や行事は緊張感と活気の中で進められており、生徒は勉強と部活動を両立させ、家庭学習時間が確保されている。 ・生徒は時を守り、規律徹底に向けて主体的に行動し、学校生活が落ち着きと品位ある言動に満ちている。教職員には「率先垂範」の意識が浸透し、協働性ある指導ができています。 ・次期学習指導要領を踏まえた倉吉東高の教育課程によって、生徒の社会的自己実現に向けた資質・能力が効果的に育成されている。	・年度当初は健診、生徒会行事等によって授業が欠けることが多く、特別時間割を校内模試や保護者会期間に設定し、欠けた授業を補てんしている。 ・近年、家庭学習時間は減少の傾向にあり、平成28年前期は各学年とも平均が3時間を割る。後期では3年生が増加するので、学年全体の平均時間では3時間を越える。 ・成績下位層の生徒が固定化しつつある。 ・毎年1年間の皆勤表彰者は各学年で約80名、3年間皆勤表彰者は約40名いる。 ・遅刻「0」を目標としているが、生徒にあまり認知されていない。 ・生徒には高い要求をしながら、同僚には甘くなりがちである。	・課題自習は減らすとともに、行事等で欠けた授業のチェックを日々行い、授業時間を確保する。 ・家庭学習調査を継続し、集計と分析を行い学年団に情報を提供する。担任は家庭学習調査を活用し、部活後の時間の使い方を指導する。 ・部活と学習の両立のために、部活動時間、休養日の使い方を生徒に主体的に考えさせる。 ・各教科の模試結果分析は迅速に行い、その対策と検証のための教科会を確保するとともに、教科会で検討した内容を主任会で報告検討し、教科と学年の連携を図る。 ・担任団に1ヶ月ごとに遅刻集計結果を提供する。 ・学年主導による「朝学習」を継続できるように学年部と連携して支援する。 ・生徒の課題に対して、教職員が率先して範を示し、協働性ある指導ができているか教科学年主任会でチェックする。 ・教育課程検討委員会を中心に、土曜活用と65分授業の見直しや、単位制導入も含めた新たな教育課程を研究し、改善するとともに教育課程の変更による諸規定を整備する。 ・次期学習指導要領における「社会に開かれた教育課程」という理念のもと、地域や企業と連携した活動が結びつく教育課程の編成を行う。 ・生徒の探究的な活動をあらゆる教育活動に導入することを意識して取り組むとともに、特に、総合的な学習、LHRを行事と関連させて計画立案し、関係部署と連携を取りながら充実させる。			
	「土曜日授業」「1授業単位65分」を活用しながら、「アクティブラーニング」の研究実践の進展・充実	・「アクティブラーニング」の教職員研修を通した授業改善によって、生徒が達成感と自己肯定感を感じられるものとなっている。 予習と復習の循環によって習得すべき内容の学習が進んでいる。さらに発展的学習を進めようという積極性や自主性、内発性が生徒の学びに見られる。 ・習得すべき知識の定着を基とした思考力・判断力・表現力を高める授業活動を展開し、これからの大学入試や実社会で必要な教科横断的な総合的学力を養成し、生徒の学力を的確に評価できている。	・教職員の研修として、校外教員招聘による示範授業と研究授業、先進校視察、予備校派遣、大学訪問、公開研究授業や教科内研究授業を計画通り実施しており、授業改善につなげている。 ・予習および復習が必要で、基礎的な知識がなければ理解が深まらない授業になっているが、成績下位層の生徒の固定化が見られ、予習や復習の意義を伝えきれていない。 ・課題の提出状況は良く、課題量も適切であると思われるが、課題の実施が考査や模試の結果に十分に反映されていない。 ・アクティブラーニングの成果を計測するテスト作成及び評価の仕方について研修を行い、学年末考査に出題したが、年間を通した計画的問題作成までには至っていない。	・教職員研修年間計画のもとに、アクティブラーニング型授業研究を進める。 ・アクティブラーニング型授業は継続しつつ、知識の定着とその知識をツールとして活用できるよう、課題の与え方を検討して工夫改善する。 ・授業評価アンケート(対生徒)の分析を行い授業改善を図る。 ・課題の提出状況から生徒の情報を学年で共有し、生徒の取組みが主体的になるよう、教科担任やクラス担任、部顧問で予復習の方法を指導する。 ・公開研究授業や教科内研究授業を継続し、さらなる授業改善に努める。 ・新テスト導入に備えるとともに、アクティブラーニングの成果を評価する考査問題作成および課題や評価法の研究を深め、生徒に評価の観点と配点などを適切に提示できるよう研究を継続する。 ・思考力・判断力・表現力を問う問題について、生徒に評価の観点を周知するとともに、教科会で検討し評価の客観性を高めていく。			
2. キャリア教育の充実(キャリア形成)	OJTの充実と進路指導力の継承 ※OJTオン・ザ・ジョブトレーニング	・全教職員が「倉吉東高校のかたち」に基づいて、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の意識が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと向けられるような生き方指導を行っている。	・進路学習が生徒自身のキャリア形成に対する意識の向上に十分に繋がっていないところもある。 ・昨年度末の調査結果で、「倉吉東高のかたち」について、概要把握ができている生徒、保護者の割合が減少しており、それぞれの活動の意義の理解が十分でない状況が見受けられる。	・生徒の学習が自己の現状把握とともに、生徒のキャリア形成につながるものとなっているか進路学習の内容を点検、改善する。 ・生徒が行う学校での活動の意義を、事前に学年分掌で共有し、担任や担当により、その都度発信する。 ・倉吉東高の進路指導のノウハウを共有する目的で進路検討会等により多くの教職員の参加を促し、積極的な意見交換を行う。 ・教科科学年主任会及び進路検討会等での情報が各学年、教科で周知・実行されているかを検証しながら生徒指導を進める。			
	中堅・難関大学合格者数の向上	・中部地区を代表する進学校として、生徒・保護者・中学校などからの期待にふさわしい実績を維持し、さらなる向上が期待できる。 ・国公立大学現役合格者数125名以上。 ・中堅国公立大学以上現浪合格者数60名以上。 (現役合格者数45名以上) ・難関大学現浪合格者数20名以上。 (現役合格者数15名以上) ・東京大学現浪合格者数5名。 (現役合格者数3名以上)	【国公立大学現役合格者数】 H26年度131名 H27年度140名 H28年度119名 ・新旧3年担任会(4月20日)の参加者は24名と少なく、低学年時からの指導の重要性を考えると、1、2年の学年部員も含めた全教職員の研修の場となっていない。 ・教科科学年主任会及び進路検討会での情報が学年主任、あるいは教科主任から、各学年、教科で周知され、十分に生徒指導に還元されていない。 【中堅国公立大学以上現浪合格者数】 H26年度45名 H27年度51名 H28年度30名 (現役合格者数) H26年度27名 H27年度37名 H28年度25名 【難関大学現浪合格者数】 H26年度18名 H27年度24名 H28年度 8名 (現役合格者数) H26年度12名 H27年度16名 H28年度 7名 【東京大学現浪合格者数】 H26年度 1名 H27年度 5名 H28年度 1名 (現役合格者数) H26年度 0名 H27年度 2名 H28年度 0名	・3年間を見据えた志望校指導を1年次から行なうために、生徒の目標設定を点検し、適切な目標設定となるよう学年団への情報提供を積極的に行う。 ・考査、各種模試の設定目標に対する評価分析を迅速に行い(PDCAサイクルを的確に回す)、対策に反映させる。 ・弱点科目の強化、あるいは受験生としての学習態度の育成を早期に、学年・クラス・個人それぞれのレベルで行い、機を逃さず状況を確認し指導を行う。 ・生徒の学力分析に基づいた教科指導を適切に行い、実態に即した長期休業中の補習計画等を企画する。 ・新課程における新分野の出題や高大接続改革に伴う入試内容の変更について、情報収集や分析を行う。 ・思考力や表現力の育成を目標に入試問題研究を行い、授業への反映を図る。 ・低学年次の中堅大学訪問などを通じて、生徒に高い志望をもたせるとともに、志望に見合った教科指導を行なう。 ・県外高校との交流や本校独自の講座を通じて目標達成のための意識向上を図る。 ・東大志望者に対してのチーム化を早期から行い、長期休業中の補習、あるいは3校合同東京大学対策講座等で動機付けと具体的学習対策を指導する。			

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過、達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
3. 積極的な活動の創成(活動創成)	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・全ての生徒が自己のリーダーシップを自覚し、より高きを目指す創造的な態度で生活している。	・リーダーの資質を持っている生徒は少なくないが、それを自覚し発揮しようとする態度は不十分である。	・生徒に適切に指導・助言を行うことで、それらの行事が本来目的としている領域に到達できるよう、創造性を十分に発揮させる生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事、日常的な委員会活動を通し、リーダーシップを発揮できる場面を数多く設定する。			
		・生徒自身が社会に広く関心を持ち、社会的課題に対して当事者意識を持っている。	・社会的に逸脱した行動をとる場面はほとんど見られないが、その社会に疑いを持ち、よりよくしていこうとする態度が不十分である。	・社会的課題を発見し、その解決を目指す生徒を育成するために、プレコン、ボランティア活動、主権者教育等に取り組む ・日常生活においては、交通安全指導や服装指導を通し、自己と社会との密接な関わりを意識させる。 ・生徒指導連絡票を活用して、生徒が自らの行動を振り返る機会となるよう、多くの教職員が協力して指導する。 ・登下校や学校外のマナー・行動について、生徒会執行部や学園祭実行委員会が主体的に啓発活動を行う。			
		・自分や社会の将来に希望を持ち、今現在という時に充実感を感じながら、真剣に日々の生活を送っている。	・自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多くいる中で、理想と現実とのギャップに苦しみ、学校生活を消極的に過ごしている生徒もいる。 ・概ね計画性をもって自らを律しながら生活できているが、将来への不安や見通しの悪さから、今現在が充実したものとなっていない生徒がいる。	・教育相談では、気になる生徒に関するケース会議を必要に応じて迅速に開催できる体制を維持し、早期に各方面から対応する ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを生徒を鍛える場として共通認識し、生徒がより高い目標設定ができるよう指導助言する。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自身の手で計画、準備、運営させることにより、今現在の充実が未来を切り拓く力につながっていくことを経験させる。			
4. 国際理解教育の充実と図書館の「知のセンター化」(連携発信・キャリア)	交流活動の推進 図書館の「知のセンター化」	・さまざまな国際交流の機会を通じて自国の理解を深めると共に、他国の文化や価値観を理解・尊重し主体的な交流が促進されている。	・安養高校のホームステイ受け入れや韓国研修旅行を通して、他国の文化・歴史を肌で感じ、国際交流や国際理解ということに関して理解が深まっている。 ・特別講演会を通して、真の国際交流や国際理解ということについて考察している。	・国際交流の機会を適切に捉えて、多くの生徒にその機会を提供し、学校HPや広報誌でその場面を紹介することで、保護者や外部の関係者にも交流の輪を広げていく。 ・国際交流活動に参加した生徒の報告会を設け、他国に対する理解を浸透させる。			
		・図書館が生徒の探究活動の場として日常的に利用されている。	・各種学校行事と連動して図書館が活用されている。 ・授業での図書館活用において、教科担当との連携が不十分である。 ・図書館の利用マナーが悪い生徒が見受けられる。 ・1人当たりの貸し出し冊数が11冊以上となっている。(生徒・教職員合計)	・図書館利用を促すために、学校行事に関連した企画を設け、展示の仕方などを工夫する。 ・図書館の教科学習への利用方法について、教職員の意識の向上をはかる。 ・生徒の図書館利用について、オリエンテーションを充実させると共に全体集会や学年集会などの機会を捉え、適切に使用できるように指導する。 ・「図書館ゼミ」を年2回実施することを通して、探求する力を培い、学びの幅が広がるように、運営の仕方を工夫して取り組む。			
5. 定時制教育の充実(定時制)	授業規律の確立と授業改善による学力向上と希望進路の実現	・規律ある学習態度が維持されており、学習の意義や目的を多くの生徒が理解し、その結果、一人ひとりの希望進路の実現につながっている。	・授業の規律は概ね守られており、進路実績も良好である。 ・3年生は多くの生徒が卒業後の具体的な目標を持っているが、1・2年生の中には目標が定まらない生徒もいる。	・年度当初に生徒、教職員が授業規律のルールを周知し、学校全体でその重要性を再確認する。 ・各学年とも早期に進路指導を開始し、適切な進路目標を持たせ、その実現に向けた取組を実行できるような指導を行う。			
		・生徒の授業に対する理解度や満足度が高く、学習意欲や学力が向上している。	・生徒の理解度や満足度は高いが、学習意欲が低く積極的に学習に取り組めない生徒や基礎学力の低い生徒もいる。	・常に個々に応じた授業改善に努め、生徒の理解度や満足度の高い授業を目指す。 ・教科担当1人制という特徴を生かしながらも、指導方法・教材について、教科をこえて研究指導していく。そのために、教職員間の相互授業参観等を行う。			
	生徒の主体性の育成	・生徒が主体となって様々な活動や行事を行うことによって、社会で必要とされる力を身につけることができる。	・生徒会執行部のメンバーは、行事に主体的に関わることで色々な力を身につけている。	・行事については、生徒が中心となって運営できるよう教職員の指導体制を整える。 ・あいさつ運動は「高校生マナーアップさわやか運動」にあわせて春秋の年2回実施する。 ・交通安全運動を交通安全週間にあわせて年4日間実施する。			
	積極的な生徒指導	・生徒の実態を的確に理解し、様々な機会で積極的に生徒との関わりを持ち、時期を捉えて効果的な指導を行うことができる。 ・校外での生徒の様子を把握し、家庭と協力しながら生徒を支援することができる。	・毎日の情報交換会で生徒に関する情報を共有し、適切な事前指導を行い効果的な生徒指導を行っている。 ・家庭訪問や保護者会を通して、学校の教育活動や生徒の学校での様子を理解してもらうとともに、家庭での様子や保護者の思いを把握することができている。	・引き続き情報交換会の充実に努める。 ・外部機関との会議等にはできるだけ多くの関係職員が出席し、直接情報のやり取りができるよう心がける。 ・ホームページや配布物を通して情報発信を行い、その情報がより確実に保護者に届くようにする。 ・学校からの積極的な情報提供を行うと同時に、保護者が相談しやすい体制を整え、学校と家庭の信頼関係の構築に努める。			

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取組が効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60%～80%の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40%～60%の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40%未満である。